

都市生活生協支援

第4号

1995.3.25

救援ニュース

都市生活現地救援本部
西宮市今津山中町9-9
都市生活西宮センター内
電話：0306181792

救援は新たな段階に

3月14日現在の「都市生活」西宮支部各地区の状況は復旧の兆しがみえるものの、芦屋のようにガス復旧の目途がたたない地区、近くまでガスはきたけれど高層マンションではガス、水道が止まったままなど、地域ごとの復旧に差がある。このような苦しい状況の中でも、組合員による救援活動が日々盛んになっている。

西宮中央図書館、西宮・市庭会館（いずれも香炉園）、伊丹市宮上遊園地、芦屋市大原集会所で50～150食の炊き出しを続行し、被災地全体で炊き出しが縮小していく中で、「都市生活」は長期の炊き出しをめざしている。伊丹会場には京都の大谷高校の生徒が救援に参加している。

青空市も週2回程度開かれるようになり、供給などの日常業務も順調に回復しつつある。被害の少なかった地区では地区集会所が開催され、来年度の役員選出完了した地区もある。しかし、被害甚大地区では班の消滅も発生しており、救援活動が求められている。

被災地全体で避難所の統廃合が進み、倒壊建物の撤去の進展によって全体の雰囲気が変わりつつある。このような状況変化の中で、生協が実行しなければならない救援活動の質も変わってくる。現在の救援本部体制では多岐にわたる救援要請（引っ越し、家財の保管、介護などなど）に対応しきれない。そこで、「都市生活」の組合員を中心にして、友好生協からの人材派遣援助によって、救援本部の改組拡充と長期救援計画の策定が必要となってきた。現在、4月以降の体制づくりを始めている。救援本部の主体は他生協ボランティア中心から「都市生活」組合員中心へと変わっていくことによって「都市生活」再生が可能となる。組合員の生活再生、地域の再生、そして「都市生活」の再生のために力と知恵と寄せ合いたい。

輪の連携が士協同生ニ

市空青 出し炊き 遣派スタッフ 資物援救

阪神大震災から二月。被災地では様々な助け合いの輪が広がっているが、深刻な被害を受けた生活協同組合に手を差し伸べる周辺地域の生協の動きが目を引く。

その一つ、組合員の多くが家を失い、物資流通も滞っていた兵庫県内のミニ生協を応援しようと、小規模生協のネットワークが活躍している。生協の原点である「協同」をどこまで実践できるか、模索の日々が続く。

箱詰めされた野菜や牛乳が、古びた二階建てビルの一階にある倉庫から運び出されていく。阪神電鉄久寿川駅に近い、西宮市今津山中町の生活協同組合都市生活（本部・伊丹市）西宮センター。二階に間借りした同生協のための「現地救援本部」は、今も応援の三、四人が二十四時間態勢で詰め、明かりが消えることはない。

阪神間に約六千人いる組合員のうち、百人あまりが家を全壊・半壊で失った。亡くなったのは家族を含めて四人。親類宅に身を寄せるなど自宅を離れている人は二百人前後にのぼる。「都市生活」では三十一人の職員の半分が被災したため、しばらくは組合員の安全の確認さえできなかった。

こんな状況にまず一月二十日、泉北、千里山など六生協でつくる大阪府事業生活協同組合連合会が、毛布や水など物資を運び始めた。その後、京都のエル・コープ、和歌山



以前からつながりの深かった。

「協同の精神」実感できた

被災者へ引き継ぎが課題

のオレンジコープ和歌山も支った、合成せっけん追放運動援に立ち上がり、福岡のグリーンコープ、神奈川の生活クラブ生協など全国に広がった。大阪市北区に「都市生活

た、合成せっけん追放運動援に立ち上がり、福岡のグリーンコープ、神奈川の生活クラブ生協など全国に広がった。大阪市北区に「都市生活

支援対策本部」が置かれ、救済物資の受付窓口ができた。被災地に詰めるスタッフも必要と、二月六日には現地救援本部が発足した。

現場での活動は救済物資の配送などのほか、一月末から始めた小学校などでの炊き出しが中心だ。食材は救援に参加する生協や環境保護グループからのカンパをはじめ、生産者から直接、野菜や果物の提供もあった。多い時は日に二千四百食分。三月四日まで

のオレンジコープ和歌山も支った、合成せっけん追放運動援に立ち上がり、福岡のグリーンコープ、神奈川の生活クラブ生協など全国に広がった。大阪市北区に「都市生活

た。以前からつながりの深かった。

ケストラの音楽会を催した。大阪府事業生活協同組合連

合会の松井一郎常務理事は「これまで商品開発で協力するなどつきあいはあったが、今回のように密接な連携は初めて」と話す。

「応援の依頼があったわけではありません。とにかく黙って見てられへん、応援したい、現地へ行くのは当然、という思いで……」というの

は、現地本部の渉外係を務める、エル・コープ副理事長の金森昂作さん。同コープは、

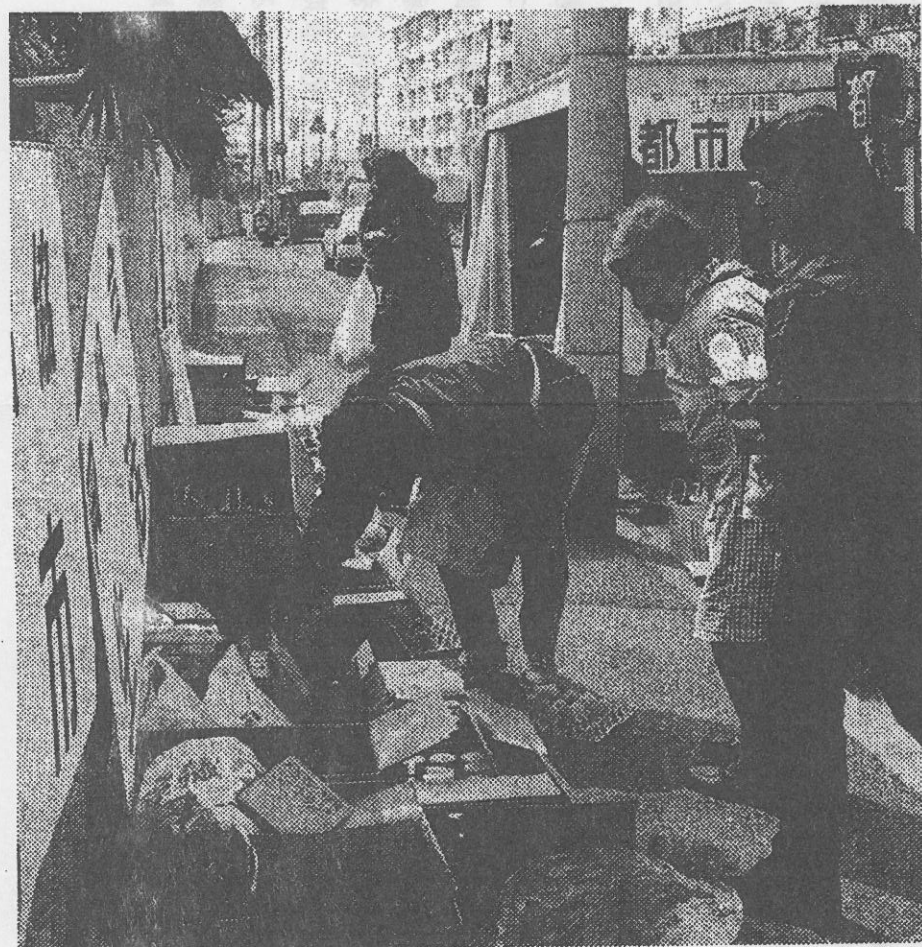
二年前の設立の際に、「都市生活」のスタッフから経営のノウハウ、運動の進め方につ

いて相談に乗ってもらった。感謝の気持ちを、非常時の今こそ返したいという。

震災は生協間の垣根を取り払っただけではない。初めは被害のひどい地域に住む組合員だけに限って物資を届けた

り、洗たくを請け負ったりしていたが、次第に線引きがなくなった。都市生活協副理事長の前川智佳子さんは「現実にはそんな区別をして

いる暇はない。とにかく困っている人を助けることが先です。



二割引きの青空市。割引分は他生協からのカンパだ。神戸市東灘区の渦ヶ森団地で

手弁当で支援に駆けつけている人は、口々に「非常時だからこそ見えてくる助け合い、協同の精神を確認させてもらっている」と熱っぽく、もっとも被災生活が長引くにつれ、「応援組」が疲れてきていることもある。四月からは泊まり込みのスタッフを現在の一人から三人へと増やす予定だが、どの生協も共同購入を中心としている小規模な生協ばかりとあって、やり繰りは苦しい。

現地救援本部長の石田紀郎・京大農学部助教授は「思の長い活動にしていくなために、応援組が表にでるのではなく、被災者に引き継ぎがないといけない」と話している。

救援本部に出入りするスタッフらの間では毎晩、ボランティア活動のありかたについて議論が続いており、ミニ生協間のスクラムも、これからが正念場といえそうだ。

「都市生活救援復興活動のためのカード」集約結果 助け合い情報の利用と

地震発生から2ヶ月、現地救援本部の設置から40日が経過した。「都市生活」理事会が全組合員を対象に「「都市生活」救援復興活動のためのカード」（以下カードと略す）によるアンケート調査を実施した。この調査はそれぞれの組合員が救援のために「何ができるか」、「何を必要としているか」を把握し、組合員相互の助け合いを促進しようとするものである。このカードは2月下旬に回収したもので、3月下旬現在では状況に対応しない部分もあるが、理事会や各支部を通じて、より組織的な救援活動が展開されるために利用されるよう期待している。以下に、カード集計から得られてことをまとめる。

*回収数は383枚で、回収率は全体で8.9%。

*青空市、炊き出しへの参加の可能性については、ともに約30%の人が参加できるとしている。

*風呂の提供、洗濯の代行など家庭でできる助け合いの申し出が多くあった。救援本部などを通じるよりも班単位、友人関係を通じて実践している人が多いのではないかと思う。

*ホームヘルパー、子供や老人の世話、話し相手のボランティアの申し込みが27件あった。

たとえば、

*心のケアが今後必要となるが、心理学を専攻した人から「話し相手」の申し出。

*視覚障害者やお年寄りなどへの新聞・雑誌の朗読のサービスの申し出。

*家財道具の運び出しや運搬の手伝いの申し出。

*アトピー体質の子供の食パン提供の申し出。

などなどのボランティア活動の申し込みがいろんな項目にわたってあり、これらの申し出が組合員間で有効に利用されることが期待される。どなたが申し出られたかの情報は理事、支部役員、職員、救援本部にある報告書に記載されていますから、こんな助けがほしいと思われる人は連絡をとってください。

組合員どうしの助け合いを進めよう。カードの情報を利用しよう。

理事、支部役員、職員、現地救援本部に相談してください。